

【麻黄】

麻黄（まおう）は、中国北部に自生するマオウ科の多年草で、お薬としては地上茎を 사용합니다。麻黄の成分研究は、日本の薬学が世界の注目を浴びた最初の業績といわれています。

まず山科元忠氏がアルカロイドの存在を認め、その後長井長義氏がその主成分をエフェドリンと命名されました。このエフェドリンは、汗を出させたり、血圧を上げたりと、アドレナリンと同じような作用があります。ただアドレナリンが即効性であるのに対し、エフェドリンは持続性で作用は比較的緩慢です。脳波を利用した実験でも、中枢興奮作用の程度は決して強くないことが知られています。

麻黄の臨床応用としては、気管支拡張作用から気管支喘息に、鎮痛・利水作用から慢性関節リウマチにも広く用いられています。

エフェドリンの鎮痛作用は十分認められていませんから、麻黄の鎮痛作用は今後の検討課題です。

さらに、桂枝（けいし）と併せますと強い発汗作用を有し、感冒の治療に繁用されます。葛根湯（かっこんとう）や麻黄湯は有名ですね。